

京三中・山城高同窓会 会誌

双ヶ丘



校長のことば
剣道部
バドミントン部
弓道部
陸上競技部

タイトル：『 追憶 』

平成 20 年度山城高等学校卒業生
野一色 美芽（のいしき みめ）作

〔作品についてのコメント〕

この場所は私にとって特別でした。
数々の思い出がそこにあって
そしてそれは一人で決して作れる
ものではありませんでした。
本当に楽しかった。
明るい日差しは私の気持ちそのものです。

写真撮影： 公民科教諭 渡邊 一郎

校長のことば



大震災に想う

学校長 北澤 和夫

大きな衝撃と深い悲しみを私たちにもたらした東日本大震災の傷跡は、物心両面において、まだなお癒えず、二次災害の原子力発電所の様相も含め、先行きの不安の要素も去らない状況が続いています。あらためて尊い命を落とされた方々のことを思い、深く哀悼の意を表しますとともに、被害に遭われた皆様方へお見舞いの気持ちを寄せたいと思います。

この震災は千年来の大規模地震と言われますが、その根拠を調べますと、八六九年に陸奥国で起きた「貞観地震」のことであろうと思えます。これは『日本三代実録』という歴史書に記録されていて、「流れる光が夜空を昼のように照らす」、「立っていることができなかった」、「海鳴りが聞こえて潮が湧き上がり川が逆流し」、「陸部まで果ても知れないほど水浸しとなり、野原も道も大海原となった」というような記述がうかがえます。

さて、私は、この歴史的な大被災の光景が、人生経験のなお浅い小、中、高校それぞれの子どもたちの目にどのように映り、心の中にどう整理されているのかと、子どもの目線で、考え、想像してみることが、やはり大切なことであろうと思っています。そこで、この未曾有の震災をめぐって、私が感じ、子どもたちにどのようなメッセージを送ったかについて、書きとどめるとともに、大人として、また教育に携わる者として、今後に向けてどのような心持ちを抱いているかを述べておこうと想います。

震災発生の一週間後に行った修了式で、私は子どもたちに次のような話をしました。

「今日は修了式ということで、年度の終わりに際しての話を用意していたのですが、予定を変えて、このたびの大震災に関する話だけします。初めに震災の様子や印象を述べて、そのあと私から皆さんへのメッセージという順で話します。

先週の3月11日午後2時46分に発生した東北地方から関東の太平洋沖にかけての地震は、想像を絶する大規模、広範囲のもので、津波を伴い、結果、「東北・関東大震災」という、未だかつてない大惨事となりました。はかり知れないほどの多くの方々が亡くなられ、まだなお行方不明の方、数知れずという状況です。このことを哀しみ、悼む気持ちを深くするのは、私もみなさんと変わりありません。発生から一週間たった今も、冷え込みの厳しい中、水、食料、燃料もままならず、40万人以上もの方々が、行く当てもなく避難生活をしておられます。被災された方々に、心からお見舞いの気持ちを抱きます。

十数年の人生しか歩んでないみなさんにとっては、もちろん今回の惨事はまさに未曾有の大きな衝撃、驚きであったことでしょう。多くのことを感じ取り、考えていることと思います。地震に因る家屋の倒壊と、一瞬にして町の家々や車とともに人の命を飲み込んでしまった津波の襲来は、人間の力ではとてもあらがうことのできない、はかり知れない「自然の力、脅威」というものをあらためて見せつけました。また次いで発生した原子力発電所の事故は、放射能の怖さのみならず、人の手で作り上げたものが、人の手に負えないものになってしまうという、皮肉な様相を示しています。発電所では、今なお危険にさらされながらも、あらゆる知識や技術を使って関係者たちが必死の努力をされていますが、この現実、人間がこれまで積み重ねてきた科学の発展、知恵というものが、まだまだ及ばない世界があるということを知らしめます。

そして、みなさんはニュースなどを通して、人の生きる姿、有様もさまざま見知ったことと思います。子どもを、あるいは家族を見失い叫び続けて尋ね歩く人、泣き崩れる姿、家も田畑も一瞬に失い、呆然と立ち尽くす人、高校への入学試験を受けたのに、明日が見えない中学生。救出に駆けつけ、がれきと泥の中で懸命に作業する人々、身の危険を承知で放射能の脅威に立ち向かう人々もいます。役場や避難所で立ち働く人、食事や毛布を提供する人、そして互いに励まし協力しあう被災者たち。奪い合うという醜いこともせず列を作って順番待ちをする人たち。

その一方で、みんな必死で生きようとしている被災者の気持ちや状況を思いやることもできず、買い占めをするなど勝手な動きをする人もいるし、それどころか、よからぬ情報を流したり、詐欺のメールを仕掛けて人をだます、貧しい心の持ち主も出現する。

被災地から遠く離れている京都においても、さまざまな関わりが出てくることでしょう。電気、石油などのエネルギー資源、農産物、工業製品、物流、等々、国全体として深いつながりがありますし、行事や旅行なども中止になったりもする。京都の町にも被災者の方、子ども生徒を迎え入れることも考えられることの一つでしょう。そういう間接的な関わりを言う前に、もしかして、みなさんの中に、身近な人が被災

地に関わっておられるということもあるかもしれません。

いずれにしても、復興に向けて長い時間をかけて、日本全体が力を合わせなければならぬし、必ず立ち直れるものです。当面の救助、支援段階にあつては、被災地の立場を思い計っての、冷静な言葉や行動を心がけることが大切だと考えます。

震災について語らなければならないことはまだまだあるでしょうが、それはおいて、ここで、私は、みなさんに三つのメッセージを伝えようとしています。

まず一つは人は共感できる生き物であるということです。あの「進化論」で有名なダーウィンは解けない疑問を抱えていました。それは、あらゆる生き物は自分が生き残るために進化し、生存競争をしますが、人間だけがどうして、人を助けようとする行動ができるのかということです。自分の食べ物を分け与えたり、自分のことを犠牲にしてまで、場合によっては命の危険も顧みず、他者を助けようとする。この崇高な人間の行動の意味が彼には謎であったのです。その答えは後の時代の「社会学」の研究を待つことになりました。人間は互いに「共感し」さらに「同情」つまり、他者と同じ心になって行動できるということです。このことが人と人とのつながりを生み、互いに支え合い、それが生きる力をもたらすという、つまり人類が社会性を備えたということなのです。

生徒自治会ではいち早く募金活動をしてくれましたが、同じ心の動きですね。自分も助けるために何かしたい、できることは何か、というふうに心が働くのです。ラジオでは毎日被災者への励ましのお便りが読み上げられていたりしています。

次に、使命感ということです。みなさんが将来の自分、進路を考える時、社会と関わる中で、一つ、強い責任感というか使命感を見出していくことが大切だろうということ。被災地に駆けつけた救助の人々、例えば警察、消防、自衛隊員、外国からのレスキュー隊員、役場の公務員、科学者たちは、おそらく「自分が行かなくてどうするんだ」という使命感を抱き、最前線で力を尽くしているのですが、場合によっては死ぬかも知れないという覚悟をもって臨んでおられる。実際、多くの自衛隊員も行方不明になっています。それらの人たちには「できることなら行かないで欲しい、行って欲しくない」と願う家族、子どもたちもいることでしょう。それを振り切ってでも出掛けなければならない。それが仕事における使命、社会に貢献するということです。ことわっておきますが、私はみなさんに、そういう危険に臨む仕事をして欲しいと言っているわけではありません。例えば、地震の到来を正確に予知する研究をするとか、クリーンなエネルギーの開発でもいい、緊急避難をスムーズに図る組織研究や、社会行動学でもいい、医療や、看護にあたる仕事、被害者の心のケアができる仕事など、将来に向けて、社会の中で、自分に出来そうなこと、しなくちゃならないと思えることを見出してくれたらなあ、と望んでいるのです。

三つ目は、何よりも人として「強い生きる意志」を持ちたいということ。

現実の生活も、明日の夢も、愛する人の命も、何もかも失って、それでも立ち直って生きていこうとする被災された人の心。私の場合、そのようになったら、果たしてそんな気持ちになれるだろうかと、あまり自信はありません。けれど、人生の途上では、突然、不条理な、不幸で悲惨な目にあうことは起こりうることであります。それでも希望を見い出して生きて行くのが人間の強さというものです。私たちは、いつかは遭遇するであろう、家族を始め、愛する人との突然の死別とか、もしかしたら経験するかも知れない大きな災害においても、悲しみに明け暮れず、打ちのめされない強い心を培いたいものだと願うばかりです。

以上、「共感」「使命感」「強い意志」という三つの言葉をみなさんに伝えました。それと共に、被災地の復興を願い、わが国全体が一日も早く元気になるようにと、みなさんと一緒に祈りたく思う。」（平成 23 年 3 月修了式にて）

以上ですが、とりわけ、話の中で採り上げた「人の心のありよう」について、子どもたちに、しっかりと受け止めて欲しいし、また受け止めてくれたと信じています。

そして、私たち大人にとりましても、このような気高い人の心のありよう、普遍的な人の精神性が示されたことは、これらがわが国において正しく継承されてきたことの証であり、近代学校教育の成果とも言ってもいいのではないかと感じています。

ところで、よく知られている、ギリシア神話のパンドラの箱の話をごく少し復習してみます。プロメテウスが残しておいた一つの美しい箱には人間の社会に、はびこることになるであろう悪い事がすべて閉じこめられてありました。「この箱だけは決して開けてはならぬ」と言い残していたにもかかわらず、女神パンドラの好奇心によって仕方なく箱は開けられてしまいます。すると、沢山の災い、悪事、苦しいことが人間社会に広がってしまいます。この話、人間の知恵というものが人間の社会を豊かにし、幸せをもたらすと同時に、苦しみや不幸をも、もたらしうるもの、いわば「両刃の剣」であるのだと示唆しているように思えます。さて箱からすべての災いが飛び出した後、最後に一つだけ残っていたものがあつた。それが「希望」だったという話です。人間に知恵を授けた神が、その知恵によって生じる、絶望的な状況を考えた上で、それでも「希望」を箱に入れておいたということ。さまざま解釈がありましようが、私は、その希望とは、不幸や苦しみを乗り越えうる知恵の力、そして人間の心を信じるということではないかと思っています。

今回の震災を通じて、私たちがまのあたりにした、人の心のありよう、人の知恵といったものは、まさに希望を生み出す原動力であつたのだと感じます。

現代の状況を表して、「夢や希望の見いだせない」と表現されることがしばしばで

す。確かに子どもたちの将来を考えると、経済状況をはじめ社会の様相は決して容易なものではありません。ましてや、今回の大規模な被災、わが国の国難という状況を見ると、明るい展望はそう簡単には見いだせないでしょう。けれども、いつの時代においても不安と苦悩にさいなまれる現実があったはずです。それでも誰もが知恵を駆使して、人の心信じ、明るい社会をと願って、未来の可能性を切り拓き、またその姿、身をもって子どもたちに希望と勇気を与えてきたはずです。それが次代を担う子どもたちに対する、大人の務めであり、教育の責務だと思います。

ただ一方で、かような艱難辛苦の精神的遍歴を次に生かし切れないというのも、人の世の常、人の有する弱さだと言えます。『方丈記』に鴨長明が1185年に被災した大地震のことを記述しています。「元暦の大地震」と呼ばれるものです。少し引用してみましょう。

「かく、おびたしく振る事は、しばしにて止みにしかども、その余波しばしば絶えず。世の常、驚くほどの地震、二三十度振らぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、若しは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種のなかに水火風は常に害をなせど、大地にいたりては異なる変をなさず。昔齊衡のころとか、大地震振りて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほこの度には如かずとぞ。すなはちは、人みなあぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。」（『日本古典文学体系』岩波より）

私は、上記の終わりの部分「すなはちは、人みなあぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。」に注目します。意味は、「その当時は、人々は皆「情けない」とか「はかない」とか言って、心の中の濁りや欲望も薄らぐように見えたけれども、年月が経って、そんなことを言う人もいなくなった。」と述べています。

今、復興に向けて、みんなが懸命に動いています。これまでの贅沢だった過度の消費文化への反省、節電の取り組みの動きもありますが、これらが一過性のものとなるのではなく、これを契機にして、わが国が、より堅実な精神性と文化の方向に舵をとっていくことを私は願っています。そして、子どもたちにとっては、この震災を通して得た、多くの知恵を、真摯な思いを、どうか今後の人生に活かし、さらには次の世代へとしっかり承継することを望んでいます。

クラブだより

剣道部

顧問 田内 浩



山城高校剣道部は現在、男子十名女子四名（内マネージャー一名）で活動しています。顧問は吉見、安藤と田内の三名です。部員の殆どが一年生で、まだまだ経験不足なため、大会で良い結果を残すに至っておりませんが、同窓会の「京三中・山城高剣友会」の支援を受けながら毎日活動を続けています。

剣道が他のスポーツと大きく異なる点は、武道としての教えが大切である事です。それは「礼儀」であったり「相手を思う気持ち」であったりします。現代の高校生に欠けている「教え」を、剣友会の方々から細かく指導していただき、大変うれしく思っています。

今年も一月五日に「京三中・山城高剣友会」の新年会に参加させていただき色々な話題で盛り上がり、楽しい時間を過ごさせていただきました。「剣友会」の総会や新年会に参加させていただき、OB・OGの方々と当時の学校生活やクラブ活動についての色々な話題で盛り上がり、楽しい時間を過ごさせていただきました。高校時代の苦しかった事や楽しかった事が一生の思い出になることは本当に素晴らしいことだと感じずにはいられません。若い世代の卒業生がさらに多く参加して「剣友会」を盛り上げていってほしいと思います。

一月八日に初稽古を行い、OBの先輩方に稽古をつけて頂きました。`気魄、`集中力、`不屈の精神、など現役生に足りない事をたくさん教えていただき、本当に感謝



しております。また、寒い中、最初から最後まで看取り稽古して下さいった先輩方にも感謝申し上げます。

剣道を通して人と人につながりを感じ取り、将来山城高校の卒業生として社会で立派に活躍してくれることを日々願いつつ指導を続けています。

バドミントン部

今年のバドミントン部は、女子ばかりの37名でしたが、総合体育大会が終了し、3年生が引退しました。総合体育大会の結果は、シングルで1名、ダブルスで2組が



ブロック予選を勝ち上がり、府下大会に出場しそれぞれ2回戦まで進出しました。

今年の夏も岡山県にある国体でも使われた落合総合運動公園内にある白梅体育館で合宿をする予定です。

コート10面を貸し切りで使用でき、普段学校では、狭くてできないような練習をし、技術的な強化をおこない、夏の大会での活躍を目指します。

下の写真は、今年の春に行ったOG会の様子です。バドミントン魂をいかして、最後まで負けないという粘り強さをもって、社会へ出て活躍したり、大学へ進んで研究を深めたり、留学をしたりと、つきない話題を伴って交流戦をすることができました。

顧問 渡邊 一郎

弓道部

前回（平成21年7月）に報告して以来の報告となりますので、この間約2年間の状況報告をさせていただきます。

私は山城高校で弓道部顧問となり4年目を迎えます。前任者の村瀬先生の指導と生徒たちが伝統的に引き継いできた練習等で実績が着実に上がり、平成20年度の選抜弓道大会に女子個人で全国大会出場を果たしたこと等は前回報告させていただきました。21年度に入り、外部指導者として、川口妙子教士六段という素晴らしい指導者の方に来ていただくことになり、さらに指導の成果は上がってきています。21年度秋には男子団体で京都府2位となり、男子個人では福井孝騎君が京都府5位となり近

畿大会出場を果たしました。また、11月に行われた選抜弓道大会京都府予選では女子団体で最後に惜しくも1本差で全国大会出場は逃しましたが2位となり、女子個人でも角森美和さんが京都府6位となり、近畿大会出場を果たしました。

22年度は、インターハイ予選で、女子団体は2次予選の4チームの中に入りました。リーグ選で京都外大西チームと2勝どうして対決し、惜しくも敗れ2位となり沖縄での全国大会には出場なりませんでした。また、女子個人の部では磯部萌さんが決勝の射詰めで、惜しくも第3位となり、2位までが全国大会出場でしたのであと一步まで到達しました。また、秋の近畿大会京都府予選では、女子団体で3位となり、近畿大会出場を果たしました。選抜弓道大会予選では、残念ながら団体も個人も近畿大会出場はできませんでしたが、先の近畿大会と併せて、開催県として、1年生、2年生で裏方仕事をきちんとやてくれました。年度末、20射会では、男女合わせた中で、1年生の有山千尋さんが、見事3位となりました。女子では、トップの成績でした。同窓会員である慶田先生も弓道の腕がますます上がり、生徒たちを外部指導者の川口先生共々指導してくださっています。

23年度になり、新入部員もたくさん入部して活気のあるクラブとなっています。3年生は3人だけになっていましたが、男子は田久保顕人君が、女子は部長を務めた野口茜さんと、四ツ谷想羅さんがそれぞれの引退まで頑張ってくれました。現在は、2年生水尾千尋部長、2年生有山千尋副部長、2年生河合唯副部長、2年生遠田紗恵会計を幹部として、2年生男子部員も積極的に後輩を指導しています。

戦績は、23年度に入り、京都府総合体育大会で、3年生野口茜さんが女子個人で第5位となりました。インターハイ予選では、女子団体（野口、有山、河合、遠田、水尾、四ツ谷）チームが3年連続となる2次予選進出を果たし、今年はリーグ戦1勝2敗で第3位となりました。女子個人では、水尾千尋さんが、第3位となり、これも全国大会まであと1歩というところでした。1年生はまだ的前に立てていない状態ですが、その日が来るのを楽しみに地道な努力を続けています。2年生は秋の大会でいい結果が残せるように練習にいそしみ、後輩の指導に励んでいます。

（文責 中瀬 浩）

陸上競技部

或る金曜日の夕方、カメラを肩に母校のグラウンドにブラリと出かけた。梅雨の中休みか、晴れ上がって真夏のように暑い日だった。グラウンドは広く思える程ヒッソリしていた。そんな中、黒く焼けて元気良さそうな七人の侍がいた。近づいて「他の人は



いないの？」と聞くと、「今日は金曜日でオフです。」と答える。「オフって何？」と聞くと、「……」と説明してくれたが、こちらは耳が遠いので、良く聞こえなかった。聞こえるふりして「ふん、ふん」と言って会話をごまかし、「俺の名前を知っているかい？」という誰も知ってくれていない。名刺をみんなに配り、写真を写しました。残念ながらグラウンド訪問は失敗でした。再

会を約して退散しました。

次の日、今度は部室を訪れました。又、失敗でした。オフというのはテスト前で練習はお休みということだったのです。

ついにテスト（期末考査）が終わったので、勇んでグラウンドへ出かけました。今日こそは部員全員に会う事が出来ました。しかし、誰もキョトンとして私を知ってくれません。それで又名刺を配り、自己紹介をしました。昭和28年の卒業生であると言っても時間的距離を測りかねるのかよく分からない様子です。82才だと言ってももう一つピンとこないようです。それで専門種目は長距離、5,000メートル、記録は17分28秒と言いましたら俄に親近感が生まれました。

練習は5時までで、その後は別の場所へ移動するというので、一緒に行きました。せまいグラウンドを野球・ラグビー・サッカーなどとシェアリングしながら使うのですから、大変です。写真を写そうとカメラを構えて「ひとつ、笑おうか？」と言ったらみんな笑ってくれました。

（陸友会会長 5回卒業 高林藤樹）



部名	問名(敬称略)					
硬式野球	手島	北山	安藤	村山	中瀬	岡田
テニス	山内	西山	西村	渡邊史	都築	
ソフトテニス	神谷	小坂井	山本渚	栗山	畑	
男子バスケット	西田	磯田修				
女子バスケット	永田	堀井				
男子バレー	飯島	渡辺博	磯田ミ	(能勢)		
女子バレー	能勢	平岡				
陸上競技	野々口	山下	原田			
水泳	阪本	安養寺	山本渚			
山岳	村山	田中	栗山			
サッカー	前田	伊藤	三宅隆	宮崎	岡田	
卓球	都築	大道	吉見	安養寺		
ラグビー	江村	市谷	高田	(渡邊博)		
剣道	田内	安藤	吉見			
柔道	田中	江村	岡田	原田	田内	
弓道	中瀬	慶田	高野	酒井		
バドミントン	渡邊一	白石安	久世			
バトントワリング	三箇山	中口	小林			
ハンドボール	園山	中村弘				
ボート	慶田	谷口				
	文化系					
部名	顧問名					
合唱	中口	川勝				
茶道	安本	三宅	東本			
吹奏楽	高橋	白石安	中瀬	大八木	中村聡	川勝
軽音楽	川勝	伊藤	市谷			
美術	高間	高田				
手話	櫻井	山本里				
書道	河合	今西				
放送	都築	中瀬	浅野	栗山		
写真	高野	畑	(都築)			
イラストレーション	久世	北河	津田			
ダンス	河村	谷口	浅野			

平成 22 年度 京三中・山城高同窓会 会計報告書

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日 (単位 円)

収入金額 6,721,791

支出金額 608,143

差引残高 6,113,648 (平成 23 年度へ繰越)

収入の部

項目	金額	明細
繰越金	5,673,716	前年度から繰越
入会金	1,041,000	平成 22 年度卒業生入会金 347 名分
雑収入	7,075	協賛金、預金利息
合 計	6,721,791	

支出の部

項目	金額	明細
同窓会活動推進費	100,000	部活動全国大会出場激励金、国際理解教育推進に向けた補助金、ホームページ管理費他
山城塾開催経費	18,400	2 回開催 講師交通費等
記念品費	234,360	平成 21 年度卒業記念品 卒業証書ホルダー
会議等経費	255,383	理事総会開催費、双ヶ丘発刊費、郵送料他
合 計	608,143	

平成 22 年度 同窓会名簿編集会計報告書

収入金額 1,287,965

支出金額 0

差引残額 1,287,965 (平成 23 年度へ繰越)

収入の部

項目	金額	明細
繰越金	1,287,460	前年度から繰越
雑収入	505	郵便貯金利息
合計	1,287,965	

支出の部

項目	金額	明細
—	0	
合 計	0	

会計報告・会計監査報告

上記の通り報告します。

平成 22 年 4 月 5 日 会計 今井 正治

会計 長砂 佳明

上記会計を監査の結果、適切に処理されているものと認める認める。

平成 22 年 4 月 3 日

会計監査 高見 潔

会計監査 三中西久雄

会計監査 細野 吾